The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『源氏物語』における出家
Author(s)	Chotikaprakai, Attaya
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43336
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

氏　　名	CHOTIKAPRAKAI,ATTAYA（ちょーてぃかぷらかーい あったや）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16696　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	『源氏物語』における出家
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　伊井　春樹 （副査） 教　授　出原　隆俊　　助教授　荒木　浩

論文内容の要旨

『源氏物語』は光源氏を中心に、男女ともに多数の人物が、さまざまな運命に翻弄されながら登場し、また舞台から姿を消していく。はなやかな世界に彩られる一方では、また多くの人々は仏道へと志向する。どのような人々が出家し、仏道の世界に身を置くのか、その運命を作品世界の中に位置づけ、生き方を究明するとともに、『源氏物語』における仏教の意義を求めたのが本論文の内容である。全体は、第一章「藤壺－子供のため出家する宮」、第二章「空蝉－『うき身』を棄てる尼君」、第三章「六条御息所－もの思いで出家する女」、第四章「女三宮－もののけによって尼になる姫君」、第五章「浮舟－世を棄てる姫君」、第六章「朱雀院－病気がちの入道の帝」、第七草「源氏－世の無常を悟る主人公」、第八章「その他の人物について」の、一人一章ずつあてた八章からなる。

『源氏物語』において、出家する理由はさまざまあるが、実行に移すのはすべて女性たちであり、男性の多くは道心を持ちながら、大半は出家を果たそうとはしないと、まず作品における全体像を示す。そのような中にあって、なぜ女性は仏道に向かうのかをテーマにしながら、物語における人物造型や構想との問題にもかかわってくる．以下、そのような問題意識のもとに、出離にいたる状況、人物相互の絆、出家後の生活、それは姿や言動、仏道の修行、光源氏との関係などにも言及していく。

藤壺中宮の出家は東宮の身の安泰を願い、念仏も往生を意図したものではなく東宮のためであったとし、出家後も「女宮」「宮」と呼ばれるように俗人としてのイメージを持ち続ける女性であったとする。空蝉は、多くの女性が「世」を厭っての出家であるにもかかわらず、彼女は「憂き身」から離れるための出家であり、「尼君」と呼ばれ、尼姿が描かれる意義についても論じていく。このように中心となる5人の女性と、男性では朱雀院と光源氏の出家をとりあげ、それぞれの作品における意義を解明していく。

論文審査の結果の要旨

登場人物たちはどのような事情で出家するのか、仏道に身を寄せて以降の役割は存するのか、物語舞台から姿を消してしまうのか、また出家の前と後との描写など、たんなる人物論ではなく、構造論的なスタンスと身体論的な視点からの考察となっている。藤壺が死後光源氏の夢に現れる月の夜は、彼女が出家した日の夜と同じ月であったこと、

それは現世への執着を意味していると論じていく。空蝉の出家後は、顔や髪といった具体的な姿は一切記されず、勤行する姿や衣だけが描写されるのは、空蝉巻における、光源氏との逢瀬の衣が背景に象徴として存することによるとする。六条御息所と光源氏との会話は歌によってなされるだけだが、出家後は歌がなくなり、普通の会話となり、出家したにもかかわらず「女」と呼ばれるなど、執念深い女性像として描かれるなどと、一人一人の女性について、詳細な本文の読みによってすぐれた批評と的確な判断を示す。さらに女三宮が出家するにあたって「つらし」「恨めし」と発することばは、彼女に物の怪として憑いた六条御息所の、光源氏への思いによって発せられたとし、浮舟は登場した時から「棄てられた女」としてイメージ化され、出家後は「姫君」と呼ばれるのは、新しい世界に生まれ変わったことを意味する、などと展開していく。

全体としては人物ごとに章を立て、やや羅列的な感じもあり、それらを統一する内容としては「はじめに」と「おわりに」に言及されるにすぎない。個々の人物考証の中で仏道のあり方については触れられるものの、これも一章を設けて、『源氏物語』の仏教思想と出家の意義を主張してほしいところでもある。ただ、作品を丹念に読み、多くの文献を利用しながら、数々の新しい発見と人物像を造型した点は高く評価できるであろう。このような次第で、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。